

早稲田大学 社会科学部  
2026 年度 入試問題の訂正内容

科目：総合問題

●問題冊子 12 ページ 8 行目：大問Ⅱ 出典情報

(誤) ～日本放送出版会、～

(正) ～日本放送出版協会、～

以上

2026年度  
総合問題  
(問題)

〈R08207018〉

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～14ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
  - (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、試験開始後、氏名欄に氏名を正確に丁寧に記入すること。
  - (2) マーク欄には、はっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	<input checked="" type="radio"/> 良い	<input type="radio"/> 悪い	<input type="radio"/> 悪い
マークを消す時	<input type="radio"/> 良い	<input type="radio"/> 悪い	<input type="radio"/> 悪い

5. 記述解答用紙記入上の注意
  - (1) 記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
  - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
  - (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
7. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
8. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
9. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
10. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

I 問題文A, Bを読み, 問1の解答について, 記述解答用紙の所定欄に記入せよ。問2～8については, 各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び, その記号をマーク解答用紙にマークせよ。

### 問題文A

江戸時代の人々がどの季節に死亡することが多かったのか, なぜそうなったのかについて, まず検討しよう。江戸・本所回向院の過去帳から得られた1815年(文化12)～1876年(明治9)の死亡数についてみると, 死亡が多いのは夏季で8月にピークがあり, 死亡数が少ないのは5月を中心にして春から初夏にかけての季節である。1月は目立たないがごく小さな山があると言っていいかもしれない。1899年以後の「季節病カレンダー」の歴史的変遷を明らかにした榎山政子によると, 20世紀の季節変動は ①。江戸における19世紀の死亡の季節変動は, 20世紀初頭のパターンに準じるが, もっと夏季の山が強調されていることが特徴である。

しかしこのパターンはいつでもそうであったとは限らない。種々の原因で大量死亡が起こる危機の年には特有の型が現われた。10年期ごとに分割して共通の変動型を描く時期をまとめてみると, 3つの型を区別することができる。I期(1815～20, 21～30, 41～50)は最も平均的な「平常年」である。III期(1851～76)には, 1858年(安政5)と翌年の夏のコレラ, および1862年(文久2)夏のコレラと麻疹の大流行があった。

II期(1831～40)は最も特異なパターンを示す。いうまでもなく, この期には1837年(天保8)をピークとする大凶作が含まれており, 端境期の食料品高騰に基づく栄養不足と流行病の発生が重なって, 収穫期前の死亡を増加させたのである。

江戸時代の死亡の季節型に関する研究は, 史料上の制約もあって, ほとんどは18世紀中期以降に集中している。したがって17世紀にはどのようなようであったか, さらに江戸時代以前はどうだったのか, まだ確実なことはいえない。しかし手掛りはある。過去帳を用いた死亡の研究は, 宗門改帳が作られる以前のより古い時代の死亡現象についても教えてくれるからである。

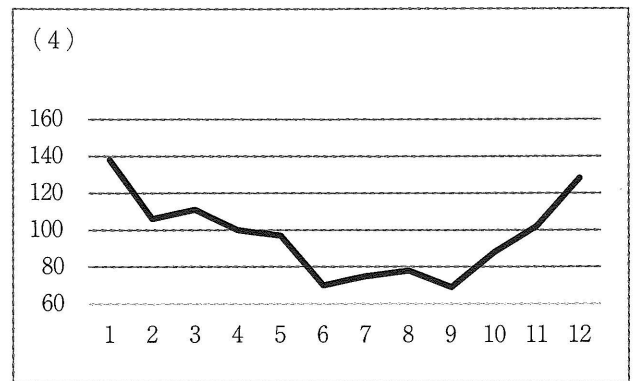
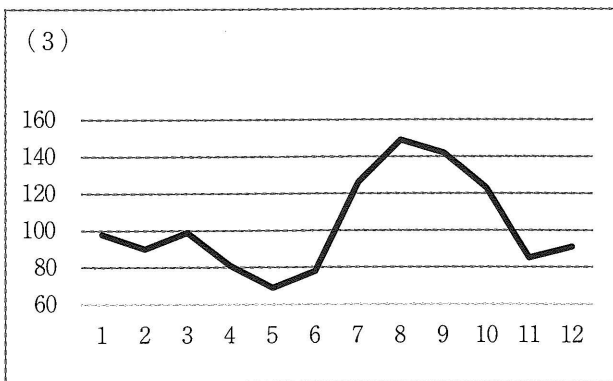
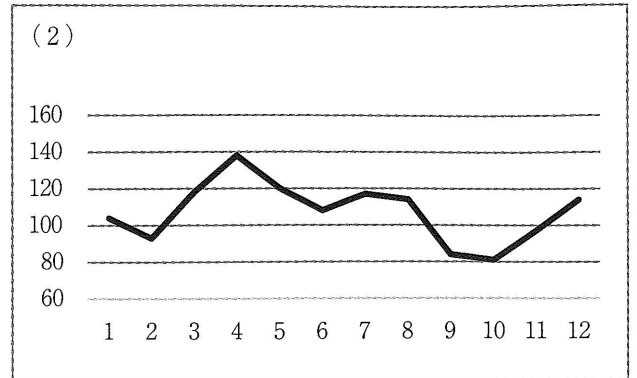
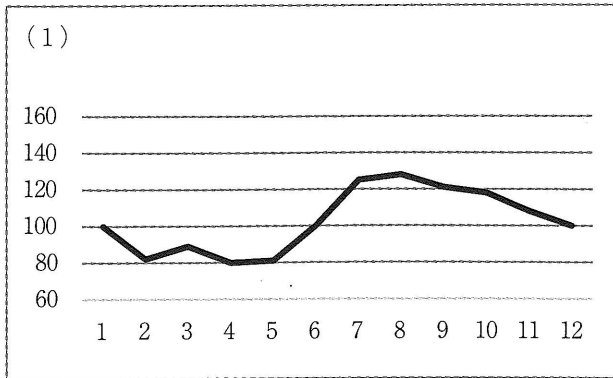
田村憲美は下総の寺院過去帳(日蓮宗本土寺)により, 1394年から1592年にいたる200年間の死亡の季節性を明らかにしている(『日本中世村落形成史の研究』)。それによってこの時代の死亡の季節型は江戸時代とは大きく異なっていたことがわかる。近世以前型ともいべき季節型は江戸時代にもみられたが, それは大規模な飢饉に特有のものであって, いつでもみられたわけではない。ところが15世紀には全期間にわたって例外なくみられたのは, ②を示している。このパターンは, 16世紀以後, 変化する。5月の死亡割合が低下していくのであるが, その原因として ③が重要であったと指摘されている。

(出典: 鬼頭宏(著), 『人口から読む日本の歴史』講談社, 2000年。問題作成の都合上, 表現の一部を省略・改変した。)

問1 空欄 ① には、20世紀における死亡の季節変動のパターンの変化とその理由を説明する文が入る。その内容を図1・2を参考にして説明せよ。全体で60字以内とし、句読点は文字数に含む。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

問2 下線部 (ア)・(ウ) の季節型をあらわすグラフの組み合わせとして、最も適切なものを1つ選べ。なお、グラフは月別(新暦)の平均死者数を指数(年平均を100とする)で表したものである。



- a. (ア) - (1) (ウ) - (2)
- b. (ア) - (1) (ウ) - (3)
- c. (ア) - (1) (ウ) - (4)
- d. (ア) - (2) (ウ) - (1)
- e. (ア) - (2) (ウ) - (3)
- f. (ア) - (2) (ウ) - (4)

問3 下線部(イ)に関連して、江戸末期の流行病に際してつくられた図3と史料から読み取れることとして、誤っているものを2つ選べ。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

〔史料〕歌川国麿「八丈嶋の鎮守 正一位為朝大明神来由」

鎮西八郎為朝公ハ、六条判官為義公の八男にして、武勇絶倫、怪力無双、強弓名誉の勇将也、此君不運にして流罪に逢玉ひし時、大嶋より八丈へ押渡り、島人等を撫育し玉ひしかバ、尊敬すること大方不成、或日濱邊に耆人の翁漂着し島人に向て申さく、我ハもかさを護る神也、汝等早く赤の飯・神酒等の供物を捧げ、宜しく我を信ぜよと言、島人聞て驚騒くを、為朝早くも聞召、此所に出来玉ひ、疱瘡<sup>(注)</sup>神を叱りこらし、汝ハ世人を苦しましむ邪神にて有けるか、我かくて在からハ此島あらん限り此地の土を不可踏、亦我姓名を印したる家へも入ことなかれ、この二ヶ条を守らずバ目に物見せんと怒り玉へバ、疱瘡神ハ恐れおののき免し玉へ、仰の趣決して背き申まじとて、一通の証書に手判を押して参らせけるとぞ、斯て後今の世に至迄彼島に此病患なく、又この神に疱瘡の願をかけぬれば皆軽々と平癒なすとぞ、いとも賢こき神徳也、

(注) 疱瘡(もかさ):天然痘ウイルスを病原体とする感染症のこと。

- a. 疫病神は、男の老人の姿をしている。
- b. 薬屋は、商品の薬が売れて繁盛するので、遊女や天ぷら屋の暴動を止めている。
- c. 医者は、源為朝の手判を押した証書を見せて、疫病神が立ち去るよう諭している。
- d. 湯屋は、客足が減って商売ができないので、疫病神を取り押さえている。
- e. 芸者は、客足が減って商売ができないので、怒って三味線をふり上げている。
- f. 源為朝は、疫病神を叱って伊豆大島から立ち去らせたことで神となった。

問4 空欄 ② ・ ③ に当てはまる文章の組み合わせとして、最も適切なものを1つ選べ。

- (1) 春から初夏にかけて米不足が恒常的であったこと
- (2) 春から初夏にかけて流行病が多く発生していたこと
- (3) 春から初夏にかけて異常気象が頻発していたこと
- (4) 米の二期作が普及したこと
- (5) 裏作として麦栽培が普及したこと

- a. ② - (1)      ③ - (4)
- b. ② - (1)      ③ - (5)
- c. ② - (2)      ③ - (4)
- d. ② - (2)      ③ - (5)
- e. ② - (3)      ③ - (4)
- f. ② - (3)      ③ - (5)

問題文B

死産は出産前の胎児死亡なので、母体外の環境とは直接関係がなく、食物などからの栄養摂取と労働などによる栄養消費の差分の影響が蓄積され顕在化する母体の健康状態に大きく依存する。それに対して、新生児死亡のうち、その一部は新生児を取巻く生活環境の悪化など出生後の原因や遺伝的な原因によるが、多くは母体内環境の変化から生じた原因による。母体内環境の変化は母体の健康状態から影響を受けるので、新生児死亡の多くも母体の健康状態に大きく依存するといえる。母体の健康状態がより良くなれば、胎児および新生児の死亡リスクは低下するので、それを反映して死産率と新生児死亡率は低下するはずである(註)。そのときの両死亡率の関係は、横軸を死産率、縦軸を新生児死亡率とした図4の矢印Aのような左下向きの線として描くことができる。また母体の健康状態がより良くなって ④ しても、重篤な症状に陥りやすい急性伝染性疾患の一時的な流行により ⑤ すること(矢印B)や、感染した母体をとおして胎児に影響を与え ⑥ することもある(矢印C)。その場合でも流行がおさまれば新生児死亡率、死産率はともに低下するはずである(矢印D)。疾病環境(人間の健康に影響を及ぼす主に生物的環境)、母体の健康状態が改善され、新生児死亡率と死産率がともに低下傾向にあるとき、死産率だけが数か月のうちに上昇することはないだろう(矢印E)。万が一そのようなことが起こったとしても、それが再び数か月のうちに低下に転じることはない(矢印F・G)。死産率に大きな影響を与える母体の健康状態は、短期間のうちに良くなったり悪くなったりはしないと考えられるからである。

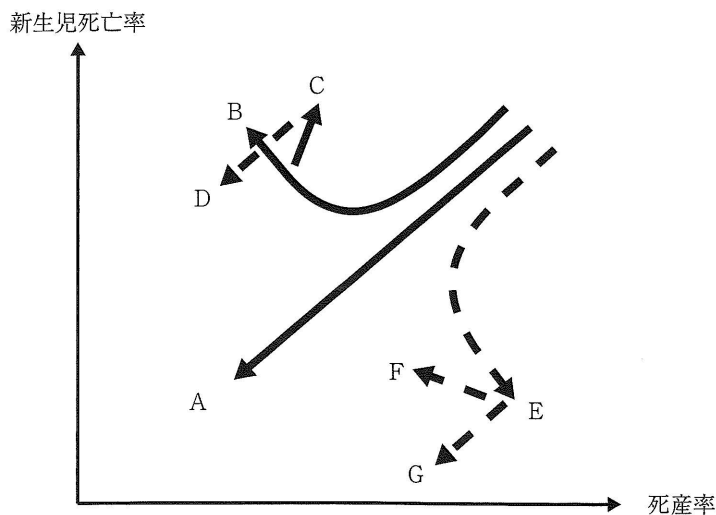


図4 死産率と新生児死亡率の動き(概念図)

このことを念頭に置いて図5の散布図をみよう。1899年から1942年までの死産率（横軸）と新生児死亡率（縦軸）との関係が描かれている。マーカーと西暦年が表示されている実線は人口動態統計に記載された出生数からそのまま計算された死亡率（図中の「記載出生数に基づく」）であり、マーカーのない実線は届出遅れを含めて推計された出生数から計算された死亡率（図中の「推計出生数に基づく」）である。「推計出生数に基づく」死亡率の系列は「記載出生数に基づく」死亡率の系列よりも左側に位置しているが、ふたつの系列の死亡率の変化パターンは変わらない。ずれ幅を見ると、とくに1900年代に大きいのがそれ以降では小さくなる。それは1900年代にはいまだ届出遅れが多かったのに対して、1910年以降では減少したためである。

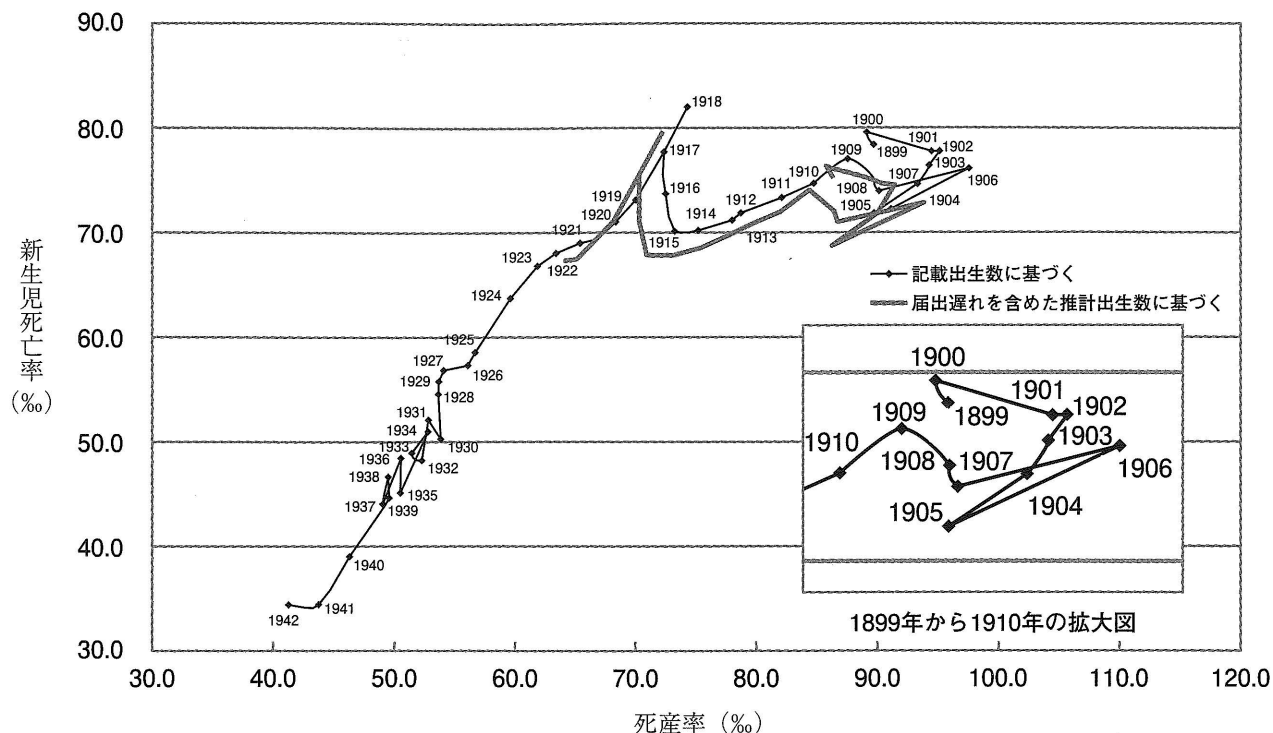


図5 死産率と新生児死亡率の関係（沖縄県を除く全国）

死産率と新生児死亡率の動きを概観するとき、1910年代以降においては1918（大正7）年前後と1930年代に例外が存在するものの、大まかに両死亡率はともに低下傾向にあるといえる。図4の矢印Aで描かれるような左下がりの傾向である。その背景には母体の健康状態の向上があると考えられる。一時的な現象であるが、1916（大正5）年から新生児死亡率が上昇をはじめ、おくれで死産率も上昇し1918年にふたつの死亡率はピークを迎えた。スペイン風邪の流行が直接乳児に影響を与え新生児死亡率を上昇させ、さらに母体への感染をとおして死産率を上昇させたと考えられる。1919年から再び、死産率と新生児死亡率は低下しはじめた。1930年代に入ると死産率の低下速度は鈍り、年によっては新生児死亡率のわずかな上昇がみられるものの、全体では両死亡率は低下傾向にあったといえる。

上述のように説明できる1910年代以降の動きに比して、1900年代の動きは大きく異なっている。1900-02年における死産率上昇と新生児死亡率低下、両死亡率の1902-05年における低下、1905-06年における上昇、1906-07年における低下、そして1907-09年における死産率低下と新生児死亡率上昇である。これらのうち、1906（明治39）年前後（1905-07年）の動きは、出生の届出年違いによって説明できる。1906年の干支は、60年に一度の丙午（ひのえうま）である。この年に生まれた女性は夫を殺すという俗信がいまだ多くの人々に影響を与えていたため、1906年生まれの女児が、前年の1905年、あるいは翌年の1907年の生まれとして届けられた場合が少なくなかった。

⑦

1905-07年を除いてあらためて1900年代の変化を検討しよう。1900-02年では死産率上昇と新生児死亡率低下、1902-04年では両死亡率の低下、1908-09年では死産率低下と新生児死亡率上昇がそれぞれ確認できる。上述のと

おり、母体の健康状態は短期間のうちに良くなったり悪くなったりすることはないので、このような動きは現実を反映したものとはいえない。1910年代以降、死産率と新生児死亡率が低下傾向にあったことは先に示したとおりである。そして、その背景には母体の健康状態の改善があったと想定できることを示した。

(出典：村越一哲(著)、「明治・大正・昭和戦前期における死産統計の信頼性」『人口学研究』第49号、2013年。問題作成の都合上、表現の一部を省略・改変した。)

※著者名に誤りがあったため、Web掲載に際し、上記の通り訂正しております。

(注) ここでは、「新生児死亡率」を出生1000に対する生後1ヵ月未満の死亡数と定義する。「死産率」とは、死産と出生をあわせた出産1000に対する妊娠約4ヵ月以後の死産数である。

問5 空欄 ④，空欄 ⑤，空欄 ⑥ の内容を示す語句の組み合わせとして、最も適切なものを1つ選べ。

- |    |            |            |            |
|----|------------|------------|------------|
| a. | ④－新生児死亡率低下 | ⑤－新生児死亡率上昇 | ⑥－死産率低下    |
| b. | ④－新生児死亡率低下 | ⑤－死産率上昇    | ⑥－新生児死亡率上昇 |
| c. | ④－新生児死亡率上昇 | ⑤－新生児死亡率低下 | ⑥－死産率上昇    |
| d. | ④－死産率低下    | ⑤－新生児死亡率上昇 | ⑥－死産率上昇    |
| e. | ④－死産率低下    | ⑤－死産率上昇    | ⑥－新生児死亡率上昇 |
| f. | ④－死産率上昇    | ⑤－新生児死亡率低下 | ⑥－死産率低下    |

問6 下線部(工)について、日本におけるスペイン風邪は、図6のように、1918(大正7)年11月をピークとする前流行と、1920(大正9)年1月をピークとする後流行とがあったことがわかっている。2つの流行期における各府県の死亡率を示した図7・8から読み取れることとして、最も適切なものを1つ選べ。

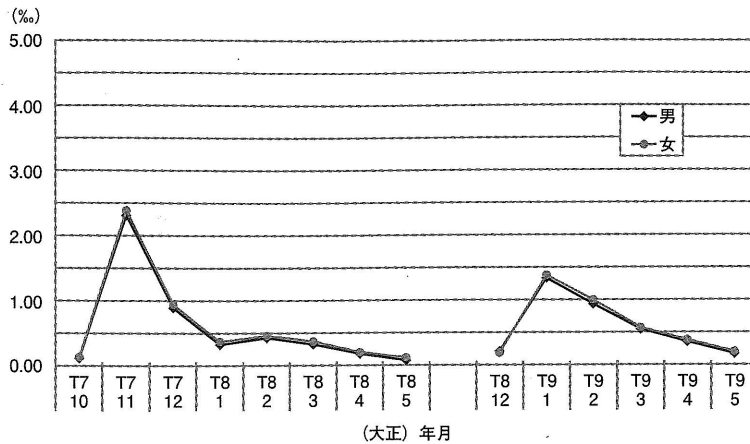


図6 月別インフルエンザ死亡率

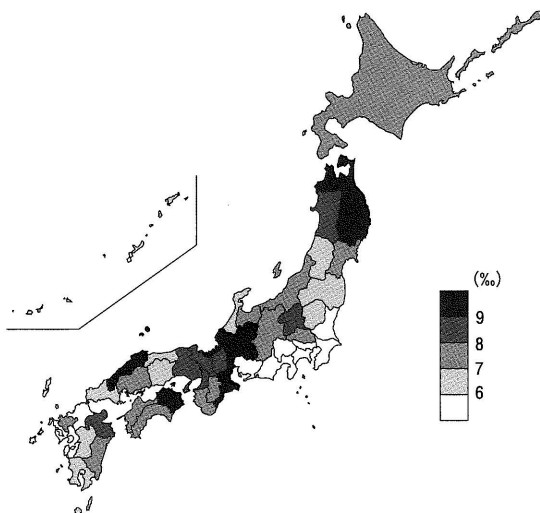


図7 府県別インフルエンザ死亡率(前流行)

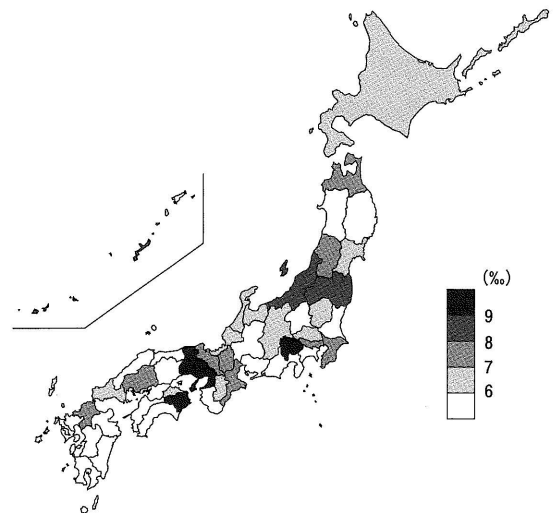


図8 府県別インフルエンザ死亡率(後流行)

(出典：速水融(著)、『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』藤原書店、2006年)

- a. 前流行と後流行とでは、死亡率の高い府県が一致しているので、2つの流行は同一のウイルスによってもたらされた可能性が高い。
- b. 前流行と後流行とでは、死亡率の低い府県が一致しているので、2つの流行は別々のウイルスによってもたらされた可能性が高い。
- c. 前流行と後流行とでは、死亡率の高い府県に大都市が含まれているので、2つの流行は同一のウイルスによってもたらされた可能性が高い。
- d. 前流行と後流行とでは、死亡率の高い府県に大都市が含まれているので、2つの流行は別々のウイルスによってもたらされた可能性が高い。
- e. 前流行と後流行とでは、死亡率の高低が逆になっている府県が多いので、2つの流行は同一のウイルスによってもたらされた可能性が高い。
- f. 前流行と後流行とでは、死亡率の高低が逆になっている府県が多いので、2つの流行は別々のウイルスによってもたらされた可能性が高い。

問7 下線部(オ)に関して、問題文Bと図9・10から考えられる内容として誤っているものを3つ選べ。

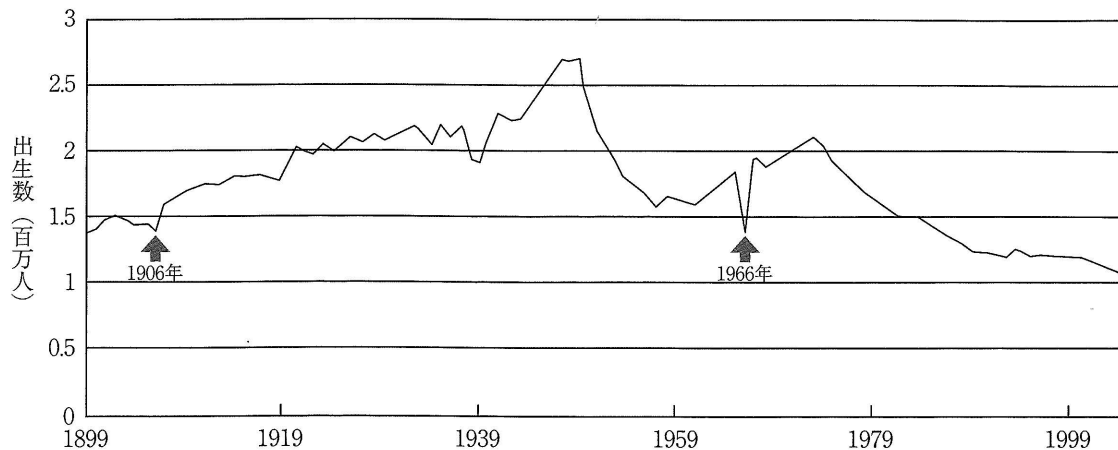


図9 出生数の推移

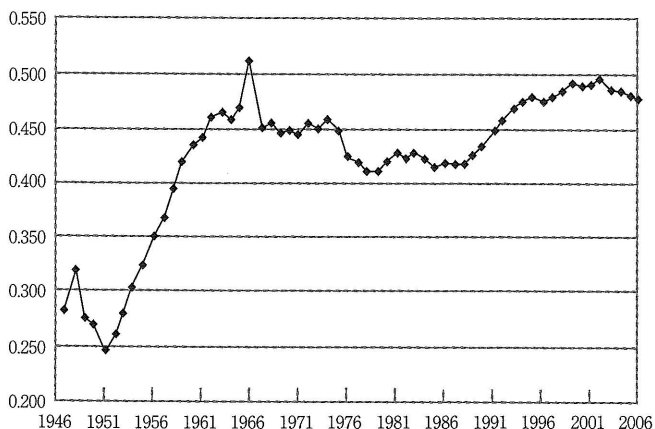


図10 出生に占める第一子の比率

(出典：赤林英夫(著)、「丙午世代のその後」『日本労働研究雑誌』569号、2007年)

- a. 丙午の年に出生数が減少したのは、俗信が多くの人々に影響を与えていたからである。
- b. 丙午の年に出生数が減少したのは、女兒について、死産率や新生児死亡率が低下したためである。
- c. 丙午の年に出生数が減少したのは、実際とは異なる年の出生届を出すなど、出生日の操作が行われたからである。
- d. 丙午の年である1966年における前年からの出生数の減少率は、1906年のそれより大きい。
- e. 丙午の年に限らず、前年よりも出生数が低下すれば、出生に占める第一子の比率は高まる。
- f. 丙午の俗信が出生に与える影響は、すでに子どもがいるか否かにかかわらない。

問8 1905-07年の動きについて述べた空欄⑦の内容として、誤っているものを2つ選べ。

- a. 死産率と新生児死亡率の1905-06年における低下がみられる
- b. 死産率の1906-07年における低下がみられる
- c. 1905年では、死産率と新生児死亡率は実際のものより低く計算される
- d. 1907年では、死産率と新生児死亡率は実際のものより低く計算される
- e. 1906年では、死産率は実際のものより低く計算される
- f. 1906年では、新生児死亡率は実際のものより高く計算される

Ⅱ 以下の問題文は、スウェーデンの経済学者クヌート・ヴィクセル（1851－1926）の経済理論について書かれたもの  
の一部である。これを読み、問 1～5 について、各設問の指示に従って選択肢の中から解答を選び、その記号をマ  
ーク解答用紙にマークせよ。問 6 の解答については、記述解答用紙の所定欄に記入せよ。

問題文

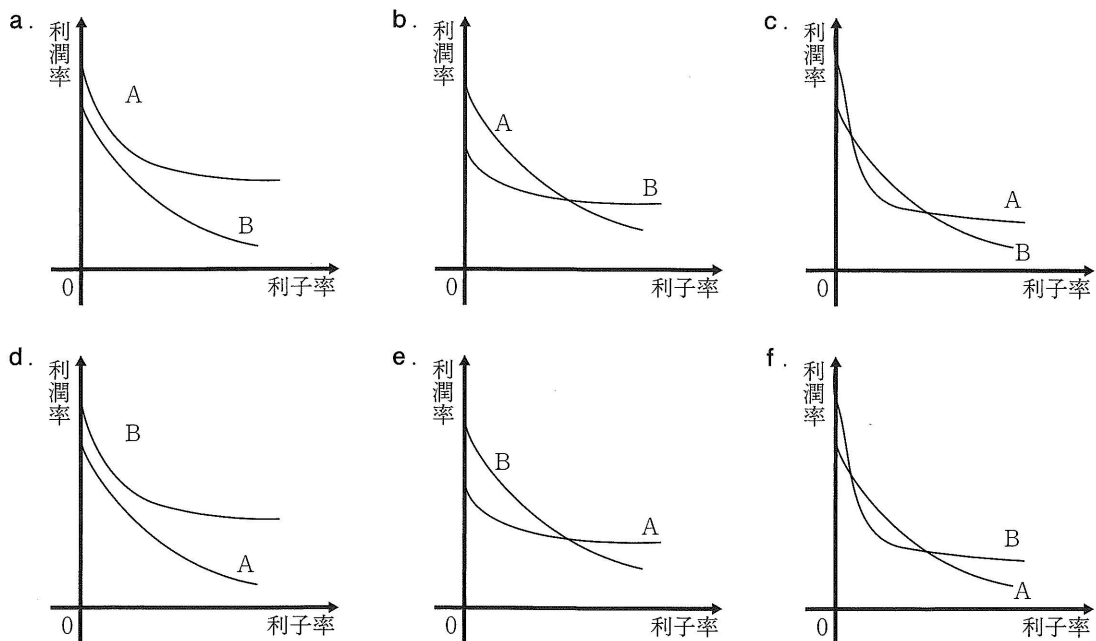
※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

※この部分は、著作権の関係により掲載ができません。

問1 下線部(ア)の問題の定式化として、最も適切なものを1つ選べ。

- a. 迂回期間が異なる2つの生産計画案A, Bについて、現在価値生産費と利潤率が大きくなるのはどちらか。
- b. 迂回期間が異なる2つの生産計画案A, Bについて、利率が0の場合と非常に高い場合のそれぞれについて、現在価値生産費と利潤率が大きくなるのはどちらか。
- c. 迂回期間と生存期間が異なる2つの生産計画案A, Bについて、利率が0の場合と非常に高い場合のそれぞれについて、利潤率が大きくなるのはどちらか。
- d. 生産計画案Aと、それよりも迂回期間の長い生産計画案Bを比較するとき、利潤率が大きくなるのはどちらか。
- e. 生産計画案Aと、それよりも迂回期間の長い生産計画案Bを比較するとき、現在価値生産費が大きくなるのはどちらか。
- f. 生産計画案Aと、それよりも迂回期間の長い生産計画案Bを比較するとき、利率が0の場合と非常に高い場合のそれぞれについて、利潤率が大きくなるのはどちらか。

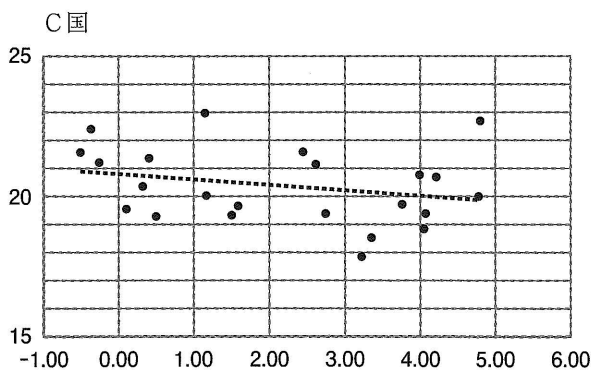
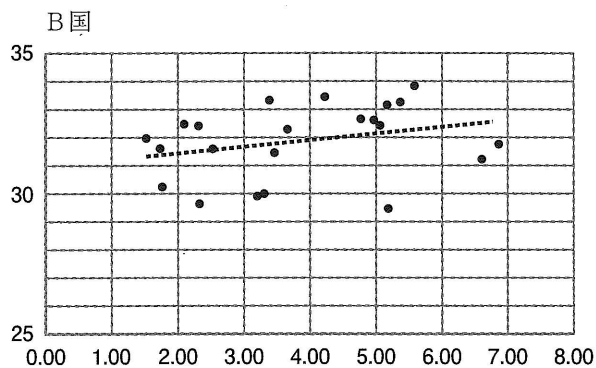
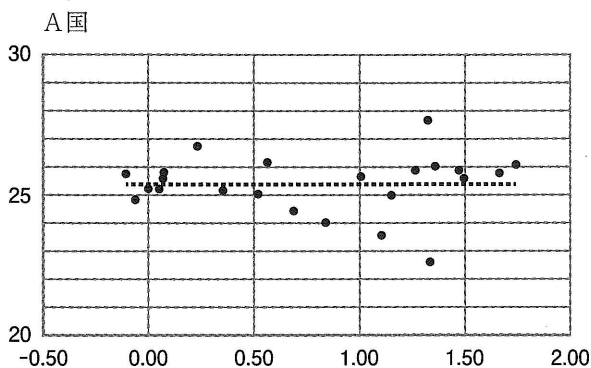
問2 A案とB案の利率と利潤率の関係を表す図として、最も適切なものを1つ選べ。



問3 空欄 ① に入る文として、最も適切なものを1つ選べ。

- a. より迂回的な生産がなされるほど、利潤率は下がる
- b. より迂回的な生産がなされるほど、利潤率は上がる
- c. 利率が低くなればなるほど、迂回期間がより短くなる
- d. 利率が高くなればなるほど、迂回期間がより短くなる
- e. 利率が高くなればなるほど、固定資本への投資はより多くなる
- f. 迂回期間が長くなればなるほど、固定資本への投資はより多くなる

問4 次の散布図は、問題文中の利率に対応する10年国債利回り（横軸）と、固定資本への投資に対応するGDPに占める総資本形成の割合（縦軸）を、2001年から2023年の期間、A国、B国、C国のそれぞれについてプロットしたものである。これらの散布図と下線部（イ）の推論との関係を述べた文として、最も適切なものを1つ選べ。なお、図中の破線はデータの傾向を示す傾向線である。



- a. いずれの国の散布図も、(イ)の推論と整合する。
- b. A国とB国の散布図は、(イ)の推論と整合する。
- c. B国とC国の散布図は、(イ)の推論と整合する。
- d. A国とB国の散布図は、(イ)の推論と整合しない。
- e. A国とC国の散布図は、(イ)の推論と整合しない。
- f. B国とC国の散布図は、(イ)の推論と整合しない。

問5 問題文の内容に合致しないものを2つ選べ。

- a. 生産には3つの基本的時間が関係している：工場の建設期間、パイプラインの充填期間、工場の生存期間。
- b. 総生産費の現在価値は、利子率によって変化しない。
- c. 迂回期間の長さには、企業者の意志が関与する余地がある。
- d. 迂回期間の異なる2つの生産計画A、Bについて、それらの利潤率が等しくなる利子率は一意的に決まる。
- e. 利子率の上昇は、固定資本への投資を抑制する傾向がある。
- f. より迂回的な生産をすると、生産に要する固定資本を節約できる。

問6 迂回化の例を挙げ、その例が迂回化の例となっている理由を説明した上で、《利子率が非常に高い場合、その迂回化は断念される》ことを説明せよ。ただし、迂回化の例は経済の例でなくてもよい。また、本文で挙げられている工場生産の例を除く。全体で200字以内とし、句読点は文字数に含む。

[以 下 余 白]

